

研究報告書

平成 21 年 1 月 21 日

東京外国語大学大学院 地域文化研究科

博士後期課程

田中 浩典

研究者氏名：田中浩典

派遣先：ホーチミン市人文社会科学大学（ベトナム）

受入教員名：Nguyen Van Hue（グエン・ヴァン・フエ）先生

派遣期間：H20.3.27～8.1 及び H20.9.24～H21.1.8

研究テーマ：南ベトナムにおける大乘仏教と上座仏教の接触

・研究の概要

本研究の目的は、「乞士派」仏教に関しての研究を広げるため、カンボジアとの国境付近の仏教形態・仏教意識を明らかにしようとするものである。つまり、今回の現地における研究は、博士論文執筆のために必要な知識の習得と現地調査が目的である。

修士論文では、上座仏教と大乘仏教を「融合」させることを目的とした乞士派を扱った。この「融合」は、ベトナム社会の変容とベトナム仏教の国家管理の下、自派の特徴を目立たせるものとして創出されたものであることを示した。これは、仏教統一の下に、徐々に各宗派の特徴が薄れていく過程の中に、乞士派も巻き込まれている状況であるともいえる。

それでは、他の少数派の上座仏教宗派は、どのようにこの状況に反応しているのかということが本研究の核となることである。

以上のことを明らかにすることにより、現代ベトナム仏教が抱える問題や、その大きな流れも示したい。

また、ベトナムの上座仏教の特色が顕著に現れる地域として、研究対象は、南部の特にメコンデルタ地域に焦点をあて論じていきたい。さらに、この地域の乞士派にも目を向けることにより、前回では不十分であった諸点も補えるのではないかと考える。

ベトナム南部、特にカマウ省やソクチャン省、アンザン省、キエンザン省といった地域は、カンボジア系ベトナム人いわゆるクメール族の住民が多く、彼らの大半が信仰しているのは上座仏教である。つまり、一般に大乘仏教の国とされてきたベトナムにおいて、この地域は上座仏教が盛んな地域であるといえる。もちろん、この地域にも大乘系の寺院や乞士派仏教の寺院も存在している。この状況下で、大衆がどのように仏教（大きくは彼らが信仰しているもの）を捉えているかということも注目すべき事柄である。

・具体的成果と今後の課題・問題点

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)による(2008年3月24日から2009年1月8日)ベトナム南部への研究派遣の報告を以下に記載する。

1. ホーチミン市人文社会科学大学における修学

ホーチミン市人文社会科学大学においては、ベトナム仏教の歴史、ベトナム仏教の特色などベトナム仏教全般に関して修学した。その後、本大学とホーチミンベトナム仏教学院にも関係が深いタム・ドゥック(Tam Duc)僧からベトナムの仏教宗派やそれぞれの考え方、ベトナム仏教教会についてのことなどを教授していただき、現在のベトナム仏教の状況を知ることが出来た。

2. 人々にとっての信仰について

信徒側からの観察

実際に、約2ヶ月間、「信徒」として乞士派寺院において参与観察を行った。それを通し見えたもの

- ・ 実践のパターンは単純で、2・3週間もあれば新しく入った信徒でもすぐに慣れることが可能である。
- ・ 熱心なものは、ほぼ毎日、夕方に寺院を訪れ、線香や供物をあげ、仏像(数ヶ所)で礼拝する。月に2日(旧暦の15日と30日)には、Le Cau Sieu(Cung Hoi)、いわゆる祖先供養のための日があり、普段参拝できない信者が集まって、僧侶と共に経をあげる。
- ・ 僧と信者の距離は比較的近く、日々の相談事や、世間話などの会話もする。
- ・ 信者の多くが、その目的は現世利益であり、入信の理由も個人的。
- ・ 新しい入信者への教育などは信者間で行われる。しかし、組織だった信者団体(組織)はなく、基本的に入信期間が長く、僧たちからの信頼があるものが、その場その場を仕切る。また、様々な儀礼において、僧の対場は、執行係のみで、(読経、説法)その他の運営、経理、食事面などは、信者が中心となり執り行われる。
- ・ 寺院間関係については、大きな儀礼(盂蘭盆会や僧の葬儀)の際に助け合う相互扶助の関係である。もちろん、赴いた僧侶への御礼(約50万ドン)は存在する。
- ・ 信者の日常は、仕事中心であり、その中でも信仰に関する習慣はあまり見られない。寺院における実践が、信仰の行為であると認識しているのではないかと考えられる。

⇒ 信者における寺院は、自己の中にある信仰心を表現できる場であり、それにより安心、自己満足感を得ることができる。また、僧との会話や他の信者とのコミュニケ

ーションを取れる場でもあるので、日常から少し離れたいわゆる「憩いの場」であるとも考えられる。しかし、熱心な信者にとっては、信仰が日常の中心となるため、彼らにとっては、寺院はなくてはならない存在であることも確かである。

3. ソクチャン省における仏教とアイデンティティ

信者にとっての「宗派」とは

一般的に信者の入信理由は個人的であり、また、他の宗派とのかけもちも見られる。したがって信者は流動的、断片的な性質を持つ。しかし、定着する信者ももちろん存在する。特に地方においては、それが顕著で、入信理由も様々だが、自分が参拝する寺院を決定することにより、信仰の対象を定め、実践する目的をかなえることができる。また、自身の死後、その寺院に祀られることも意識しており、さらに、現世利益、祖先崇拜も総合的に行えることから、熱心で定着した信者は、他の寺院への参拝は稀である。また、彼らにとっての「宗派」はあまり意識されず、入信後の宗派アイデンティティを造り上げるのみで、事前に宗派で寺院を選ぶという信者はほとんどいない。

中には、ミン・ダン・クァン（乞士派に限り）に感銘を受け、それを理由とし乞士派に入信するという信者もいたが、現在の信者の多くは先に述べたような者が多数を占める。

⇒信者にとっては「宗派」は、後からついてくる宗派という小コミュニティにおけるアイデンティティであり、信仰の本質には直接関わらない。

信仰とアイデンティティ

社会レベルのアイデンティティ

ソクチャンにおいては、大きく分けてキン族、ホア族、クメール族が混住している。仏教に関しても彼らの信仰形態は違い、仏教寺院もそれぞれベトナム系寺院（キン族）、中華系寺院（ホア族）、カンボジア系寺院（クメール族）に分けられる。民族が違って他の寺院を参拝する例は少なく（EX. キン族がクメール系寺院に参拝する）、彼らの中においても民族相応の寺院へ参拝することが当然であると考えられている。

さらに、寺院内においても、特にクメール系寺院は、子供の教育施設であり、かつ僧侶の育成施設も兼ねている。そこでは、クメール語やパーリ語経典の学習がなされている。つまり、クメール族としてのアイデンティティのひとつである言語が寺院で学ばれることにより、寺院からのクメール族としての民族アイデンティティ創造の手助けをしているとも捉えることができる。また、クメール族のコミュニティの中心の役割を担うことにより、寺院は特別な存在と言うことができる。逆に、日常生活における民族アイデンティティとしての実践の行為はなく、寺院への参拝やクメール語での会話が、この地域における彼らの主な自己同一性となりうる。

しかし、人々における信仰というものは、根深いものであり、例えば、長距離バスの発車時に、仏像の前で行うかのように手を合わせ、道中の安全を祈願するというような行為の中には、決して民族や、アイデンティティでは語れないものが存在すると考えられる。これは、ベトナムの人々の中に信仰心が根付いているということでもある。

⇒ソクチャンにおいては、民族によって、決まった寺院へ参拝する傾向があり、また、特に少数民族にとっての寺院はアイデンティティの再確認が行われる場所でもありうる。これらの議論は、宗教とアイデンティティ、民族とアイデンティティなどの問題にも関わってくるので、今後、慎重に議論を進めたい。

4. 南ベトナムにおける大乘仏教と上座仏教の接触

・ 乞士派に関して

これまで焦点を当ててきた大乘仏教と上座仏教を融合させた仏教といわれる「乞士派」についても今回の調査で収穫があった。前回調査（2005年）から得た仮説である「乞士派の“大乘化”」について、今回の調査では、表面的にも内容的にもそれが認めることができた。“大乘化”の引き金となった「托鉢の禁止」、「個別の宗派活動の禁止」とベトナム仏教の統一の側面から論じることは十分可能。

今回の調査においては、比較的深層の部分まで“大乘化”が見られた。つまり、僧侶にとっての乞士派と信者にとって、または、その地域に居住する人々にとっての乞士派への意識の隔たりが大きいことを意味する。乞士派の僧侶は、乞士派の教理である「真理」^{チョンリー}を学習することは必須であり、出家者には乞士派であることを強く意識させる。しかし、その学習方法は独学もしくは師僧より指導されるため、個人間の理解は一樣ではないと思われる。2. 信者にとっての「宗派」とは において前述したとおり、信者にとって宗派は重要視されず、乞士派いかんは入信後の問題であり、入信後もそれほど意識されないのが一般である。さらに、信者で教理の「真理」^{チョンリー}の内容を知る者もほとんどおらず、日々の実践に参加することを自分の信仰にしていると言ってよい。したがって、信者と僧侶の間での乞士派の意識には違いが生じている。そこから、出家者のための乞士派と在家信者のための乞士派の二重の構造が浮かび上がるのではないかと考える。

・ 仏教教育から見るベトナム仏教

ベトナム国内には、代表的な仏教研究機関であるベトナム仏教学院が、首都ハノイ、フエ、ホーチミンにある。今回は、ホーチミンにある仏教学院において、何度かに渡り聞き取り調査をおこなった。ここから現在のベトナム仏教の教育システム及び現状が見える。現在、データの整理中であるため、具体的なデータを用いて報告することは難しいが、ここから今後の展望を述べておく。

ベトナム仏教学院は、そもそも、仏教の研究機関、高等教育（大学レベルの）、国際交流を目的として設立されたものである。そこでは、ベトナム全土から集まってきた僧侶が、日夜、仏学に励んでいる。教育の視点から見ると、ここにベトナム仏教の性質、または指針なるものが見えてくる。教育内容は、仏教全般に関すること、外国語、経典の内容など多岐に渡る。特に、外国語は、インド語、タイ語、カンボジア語、日本語、韓国語、中国語などがあり、卒業後は、それらの国に留学する僧侶も珍しくない。ここでは、宗派の色は全く見えず、南北両宗派の僧侶が、一つ屋根の下で仏学を学んでいる。また、宗派の垣根を越えた仏教の学習がなされており、大乘、上座どちらの思想も学ばれている。つまり、ベトナム仏教界は、ベトナム仏教のレベルを底上げすることを目的としており、宗派は、ベトナムの仏教という大きな観点からは重要視されず、個々の寺院での葬儀や、儀礼において垣間見ることができるものである。ここでいえることは、確かに、大乘仏教と上座仏教が同じ場所で学ばれていることを見ると、両仏教の接触ということはあるかもしれないが、視点を変えれば、ベトナム仏教が統一されて以降、政治色も強くなり、国家による宗教の統制の下、仏教を管理しやすいような状況になっているとも言える。

5. ベトナム人研究者との交流

今回の派遣中、現地の宗教研究者と交流することもできた。特に、メコンデルタ地域の宗教を専門とするチャン・ホン・リエン（Tran Hong Lien）博士とディスカッションできたことは幸運であった。ベトナム仏教研究に従事している研究者は、そのほとんどが僧侶であるため、主観的に議論を進める人が多い中、彼女は一般の人間で、客観的にベトナム仏教を捉えている数少ない研究者の一人である。さらに、彼女は、前述したベトナム仏教学院において、教鞭をとっており、現在のベトナム仏教状況も把握している。今後も良いカウンターパートとして期待できる。

さらに、去年は数年に1度のベトナム学国際会議があり、世界のベトナム研究者の発表を聴講し、交流できたことも貴重な経験であり、今後活かしていきたい。

6. 今後の課題と予定

今回の研究派遣では、ベトナム仏教について様々な角度から見る事が出来たため、その分様々な疑問も生じてきた。具体的には、政府と宗教の関係性や民族と宗教の問題、民族政策などである。当面は、得られたデータを整理し、報告会での発表に備える。今後は研究会や学会など、今回の派遣を通して得ることができた成果を積極的に発表していきたいと考えている。

以上